『正法山六祖傳』の原本・完

The Original Manuscript of the *Shôbôzan-Rokusoden,* Finished

木　村　俊　彦
Shungen KIMURA

要旨

江戸時代前期に版行された『正法山六祖傳』は、室町時代の妙心寺六世雪江宗深が、妙心寺開山関山から五世までの略伝と花園妙心寺の由来「正法山妙心禅寺記」を書き、弟子東陽英朝が雪江宗深の略伝と跋を書いて、一冊に纏め命名したものである。筆者は四天王寺大学図書館の御世話で、龍谷大学図書館に保管されていた原本の写本を閲覧することができ、撮影して頂いた。その校訂翻刻と論考を『印度學佛教學研究』第七十巻第一号（令和三年）に掲載し、続篇を翌年の第七十一巻第一号で発表した。本稿はその完了篇として、日峰伝の訓読と義天伝の校訂翻刻と訓読、及び雪江伝と東陽跋の校訂翻刻を為したものである。江戸時代前期の妙心寺堂司行者（どうすあんじゃ／在家の助役）である能僊（仙）による版行は改竄が所々有り、指摘してきた所である。我々は原本を校訂翻刻することから始めるものであるが、版行本の改竄、時には現本の誤記も指摘した。

キーワード：正法山六祖伝　妙心寺　日峰　義天　雪江　東陽

はじめに

版行本の奥書に「時寛永拾七暦歳次上章執徐之九月、西京花園堂司行者(どうすあんじゃ)能僊、新刊于一閑軒」とある、その行者能僊が寛永十七年(1640)に一閑軒の名のもとに版行した『正法山六祖傳』の原写本が、龍谷大学図書館に保存されていることが判り、四天王寺大学図書館を通して閲覧許可を得て拝見すると、刊本と同じ寸法の、幅六寸、丈九寸の規格の袋綴じであった。二十一字十二行の丁寧な筆写で、小字で頭註・間註も書かれており、その按配では書写者の註記の如くである。青い表紙が掛っている。刊行本は鬱金色であった。自から名乗る刊行者「花園堂司行者・能僊」とは、在家の妙心寺助役という意味である。能僊(仙)は当時有力な行者だったから、ノートを親しく写して刊行することができたのであるが、ちょうど愚堂当時の能僊が出てくるので、小編『大円宝鑑国師愚堂和尚語録』(大東出版社、平成22年)の「年譜」の寛永十二年の項を参照されたい。

原写本は最後に「時天正十七(1589, 己)丑孟夏如意珠日、法山霊雲小檐下陸陽之林子書焉」と署名がある。「陸奥の国の先住職」の意味で、塔頭霊雲院住職の月航玄津であることが判明した。会津の興徳寺に住職したのでかく言うが、本庵の霊雲院に住した後、駿河の清見寺を経て、本

山妙心寺に三住し、天正十七年には龍安寺塔頭・霊光院を兼務していた晩年のことである。霊雲派の重鎮なのに謙虚な自署である。

『正法山六祖傳』は雪江宗深が妙心寺開山・関山惠玄、第二世・授翁宗弼、三世・無因宗因、四世・日峰宗舜、五世・義天玄詔の略伝と「正法山妙心禅寺記」を遺したので、雪江の法嗣の一人東陽英朝が、第六世雪江宗深伝と合わせて一冊にしたもので、「正法山妙心禅寺記」を付録のようにしている。それらは現代から見て原本を補正する事もあり、原文の角括弧内に小字で間註する。圧縮ファイルになっている原漢文は読点と句点で分けた。また天皇などの名は欠字に続ける場合があって、そのように翻刻した。本字と当用字の違いも厳密に原字、つまり雪江や書写者に従っている。原送りカナは丸括弧内に小字で遺した場合もある(編集者の筆の場合は角括弧、西暦付記は丸括弧)。筆者は『印度學佛教學研究』第七十巻第一号(2021年)に「『正法山六祖傳』の原本ー正法山妙心禅寺記を中心にー」を発表し、同「続」を同誌第71巻第一号（2022）に発表した。今回は最終篇の「完」として、第四章日峰宗舜伝の訓読と第五章義天玄詔伝の校訂翻刻と訓読、第六章雪江宗深伝と東陽跋の校訂翻刻を報告する。

日峰宗舜伝の訓読

「養源日峰舜禅師

師、諱は宗舜、字は日峰。無因に嗣ぐ。京西嵯峨の人なり。俗姓は藤氏。其の先公は邑を嵯峨に食むに因りて、焉に家居す。後に河嶋氏と号す。母は源氏の裔にして賢行有り。曽って法輪寺虚空蔵に詣で、奇男子を祈求す。百日を以て期と為す。期満つる夜、母は一老僧が龕中より出づるを夢みる。手に一枝の菊を持ち、以て之を授く。是に由り懐妊す。誕に及びて穎異。小字を菊夜叉と曰う。叔父は教うるに語孟を以ってす。一徧授けて誦す。九歳、父は携えて、邑の本源庵に投ず。岳雲の室に登り、弟子と為る。始めて薙髪し、諱を昌昕と曰う。庵は臨川寺の西に当り、大井川畔に在り。師父の私宅は庵と隣す。昔、天竜国師、建仁の請を辞する時、禅居(庵)の大鑑禅師(清拙)自から疏を製し、大衆に齎し持し去らしむ。列参し、拜請せしむ。東山の衆、已に臨川の門に造る。国師之を聞き、垣を踰えて一家に逃匿す。廼ち父の私宅なり。岳雲は天竜の高弟なり。初め臨川(寺)に住し、後、雲居に遷る。然して師の薙髪は雲居に在る日なり。十五歳にて沙弥と為り、十九歳にて得度す。早年より遊方参請の志を抱き、未だ善知識に遇わず。或いは岩栖谷飲、迹に定止無し。曽って勢州に在りし日、長光讃寺にて夏を度る。清旦、旭光を聖僧の龕に覩て、忽然として本来の面目を省得す。而して見解を呈せんと欲するに則ち師無し。夏了りて起單す。是の時奥山〔方廣寺〕の無文〔元選〕和尚、道賈重し。東関の衆半千を過ぐ。師は聞き得て直ちに遠江に抵り、其の席下に侍す。一日文問う、昕上人は何人に参見し来るや、と。師は対して曰く，多年閑らに草鞋を踏破す。全く一智半解の分も無し。近くに一寺在り、恰かも箇の本来の面目に撞着するに似たり。未だ是否を知らず。因みに所見を呈す。文は掌を拆って曰く、老僧は先に師の処に在りて、這の境界を悟得す。以って此の山に住すること数十年。尽く吾が徒衆五百員に汝が見地の者を未だ一人も見ず。然かの如くと雖も、趙州因みに甚ぞ箇の無字を道うや。這の話を汝は如何に了会するや。師は之を聞き、愈々驚愕す。遂に文の会裡に在りて無字を参得し了るなり。文は乃ち幻住庵中峰下の尊宿なり。又無文

を辞して濃陽に之く。遠山大円寺の薫南山に見ゆ。山は旧と是れ三頓棒下に於て大徹底の作家尊宿なり。然も自から韜晦し、薫庵主と号す。時の人は之を知らず、只以って、道者の家風有り、とのみ謂う。師至りて殊に推重さる。一日従容として謂いて言く、昕や、汝は法器なり。吾が会裡に在るは也た太だ惜しむべきか。吾は耄じて且つ愚なり。汝を成褫する能わず。方今、天下に大眼目を具する底の宗師は唯、無因和尚一人有るのみ。津陽の海清寺に住す。何ぞ速やかに参取し去らざるや。師は慈誨を聞きても未だ辞するに忍びず。山は再三勧諭す。無因に寄する書を作りて、師に付して曰く、之を持ちて紹介と為し去れ。師は是において応諾す。山は欣然として曰く、我が言は既に聴許さる。実に攸望なり。輒わち衲衣と草鞋銭を与えて送行す。師は書を受け、衲衣と草鞋銭は還して去る。山は別れに臨みて更に叮嘱して曰く、上人が彼に至らば、大悟大徹に非ざるよりは敢えて門を出づるべからず。願くは此の誓いを成せ、と。師は言下に誓いを発し、泣いて拝辞す。既に津州巨鰲山に之き、無因和尚に参礼す。因問う、近離甚什れの処ぞ、と。曰く、奥山より、と。曰く、無文の所示如何、と。曰く、只箇の無字を消す、と。曰く、也た好し、讐、と。是れ参禅の根源なり。便ち徳山托鉢の話を示す。向に南山の紹介書は終に托呈するに及ばずして、参堂し了るなり。爾来許多の聱訛、百錬千鍛、日夜勉励、志は少しも屈すること無し。無因は河内観音寺に遷住し、師も又五年参侍す。片野の大悟庵が適々主席を虚しうす。無因は師を挙げて之に住せしむ。観音寺〔南河内〕と相距つこと十八里。（六丁一里の義、常の三里と同じ）　師は毎日往復し、請益す。余義を究決し、曽って倦むこと無きなり。無因は特に京師〔八幡〕の圓福寺の請を受け、又随いて上京し、圓福に居す。一夕の夢に、仏殿前の柏樹上に蒼竜が明珠を弄するを覩、便ち奪得して、懐中に納む。其の翌、参学の事は了畢し、印可を蒙る。仍って諱を宗舜と改め、字を日峰と称す。無因は平居する毎に称して、舜は我に勝る僧なり。無因滅後、師は迹を濃陽春木の無着庵に屏ぞく。又、尾州の鹿尾山に登り、教寺の閑房を借りて大蔵経を看ること数年。山下の居民曰く、師、願くは一片の家山を奉つらん、以って行道の地と為せ、と。師は其の望みに俯循して、恐らく山に水無からん、と。一沙弥有り。土岐氏蜂屋の族なり。剃度して、玄瑞と名づく。之に攸を相せしむ。乍ち甘水有り、岩間より湧出す。瑞は以って曰く、乃ち草を其の処に挿む、と。瑞泉精舎と名づけ、山を号して青龍山と曰う。鹿尾山と相去ること僅か一牛鳴。共に犬山庄に在り。故に州人は指して犬山会下と曰う。注、荘の旧名は犬山、余は寺の境内に改め、乾峰と称す。師は首に把茆、頭を蓋いて一榻に端坐し、仏を呵し祖を罵り、以って足るを知るのみ。不日に輪奐を花構し、翠微の外に翬飛す。洛下の名衲は風に趨り、江湖の飽参は輻輳す。頓に竜象の大法窟と成れり。是に至り、無因師翁を奉りて開山始祖と為す。塔より其の右を以って昭穆を序するなり。（老宿曰く、無因は尾州の人。晩年屡々、雪峰・圓悟は皆郷に還る事を言う。然るに津陽に終る。師の瑞泉草創の志は茲に在り、と）　永享の初め(1429)、妙心寺は再興す。門中諸老は相議して、新住持を棟選す。其の挙に膺(アタ)り、逃れる由も無く、慨然として上京す。（詳しくは寺記に）然るに正法山は荒墟と為ること旧(ヒサ)し。只微笑の一塔のみ巍然として在り。師は拝瞻して目を挙ぐるに忍びず。是に由り日々衆を率いて普請す。瓦礫を拾い、荊榛を披く。百計して作新す。堂舎廊廡は法により稍や備わる。師も亦自から小院を山堂の傍に創り、扁して養源と曰う。兼て寿塔を卜し、帰蔵の地と為すのみ。師は少きより身を律し、三学を該錬し、老いて益々森厳なり。接人倦む勿く、丈室に

端居して、日夜応酬す。竜蛇を弁じ、虎児を擒る。且く棒喝、余力に或いは経録を講談す。四衆は欽仰すること仏出世の如し。苟しくも壇有りて楽施に度らば、多少無く悉く常住に帰し、以って修造に充つ。後来法山が中興開山の石碑を安ずるは公議を以ってなり。嘉吉二年(1442)秋八月、管領細川京兆春巒居士(細川頼之)は違和重し。将に薨ぜんとする日、師を府第に拝請して問うて曰く、生死到来す、如何が回避せん、と。師曰く、本来生に生来無く、死に死去無し。更に甚什の回避を説かんや、と。居士は聞き得て、合掌して化す。師は暮齢八十歳、奉勅して大徳寺に入寺す。三門を指して曰く、虚堂は八十にして山に再住す。老僧は八十にして初めて入寺す。関。回避処する無し。喝一喝す。粤に明年正法山にて示寂す。諸徒は全身を奉じて養源の塔に収む。実に文安五年(1448)戊辰正月二十六日也。院の昭堂に塔し、虚空蔵菩薩の金像を安置す。菊光堂を以って額と為すは蓋し託胎の瑞夢の小字等の機縁を取るものなり。滅後二十五年、禅源大師と勅諡さる。師の法を嗣ぐ者は三人、龍安義天和尚、雲谷和尚、大樹桃隠和尚なり。汾陽・大樹は一世にして絶え、唯義天の門風のみ今に盛んなり。」

義天玄詔伝の翻刻

「龍安義天詔禅師

師諱玄詔(旧名明詔、後、改玄承、晩年又自称玄詔)、字義天。嗣日峰。土州人。俗姓蘇(我)氏。入鹿大臣之裔栄子也。幼而穎異。父以王法師名之。十五歳、依本州〔四国〕天忠寺義山和尚而薙髪。義山乃霊樹三光國師〔孤峰〕高弟也。師歳十八歳得度。航海上京、直登東山建仁寺、掛塔。在開山塔護國院。初署侍客、又転侍香。孤芳菊和尚住山之日、請為蔵司。結制秉拂、京兆源公悦道居士〔細川満元〕臨法筵、樂聞。謂左右曰、吾州之慶也。既罷蔵(司)職、忽動参方之興。次年起単、見福聚春夫和尚、粗扣宗要。徑兩年東遊、到尾州之犬山。参瑞泉日峰和尚。峰素(モトヨリ)以接人為急、槌拂無倦。師亦着力猛烈、殆忘寝食。或磐石上通霄兀坐、或廊廡間踏月經行。不舎晝夜、専一研究者五年、搆得大休歇田地了也。日峰付以法語。其略曰、玄承蔵司参禅有年、雪辛霜苦、及尽玄微。風塵草動、承當宗猷。可謂我家真種草也。直是把得定、如生鐵鋳就相似。時應永三十五年戊申之春也。已而師丁(アタリ)父憂、還郷里。里人胥(アイ)議曰、粉楡今現烏鉢華。豈非是大因縁哉。當造一寺以留師。既鑿山規地、曰師言、願定華扁為開法場。師無久停意、曲順郷井情、卒書竜門山瑞巌禅寺額。未它工而上京、参覲養源師翁、即辞去、之濃州。居於可児郡愚溪菴。遂又徒於尾陽瑞泉精舎、看院累年。及師翁入滅、重入洛、為養源塔主。次年値日峰三年忌、有頌曰、阿鼻無間焔亙天。日〔々〕償口業已三年。併呑熱鉄数枚了、吐作柤栴〔栴檀〕一炷烟。是時京兆源公〔細川〕勝元年未弱冠。一日暫如嵯峨、經由西京、聞得師住養源院、枉駕参礼。昔者先春巒居士〔細川頼之〕臨溘然拜請日峰和尚、問生死一大事因縁。以是因縁故、傾心至矣。且圖建一梵刹、請師住持。當以公餘扣道也。他日使人具陳懇志。師感泣而然諾矣。仍相攸于洛之東西、獲勝概於北山之巓。乃問父老、是誰家山。父老曰、德大寺殿右府〔實能〕管内之地也。京兆便割食邑地一所、奉以易之。遂草剏伽藍、拜請師令住持焉。號大雲山龍安禅寺。用兜率悦接張無盡之機縁也。然師奉日峰師翁為開山始祖。於是四来学者雲集。上古風規粛如。厥明年京兆亦於丹州建一精舎、請師開山。其地名八木村故號米山龍興寺。慕藺陳尊宿高風也。普請資日、師与京兆運一箕土、以先清衆之労。然洛之与丹僅一日程。師毎往来、勘験学者。且日々作務、

雖雨雪不休。小根省〔劣〕機輩弗堪勤苦、多氣索而走。勅黄忽降、請住大徳寺。入寺日勅使臨法筵。源京兆与諸官員擁衛森厳。開堂罷、参闕謝恩、入對便殿。住三日〔而〕鳴退鼓、歸龍安寺。爰に値妙心開山百年忌辰。以衣資十萬銭分送五山諸刹、俵贐大衆。不要諷經、就本山営辨大會齋。迎請叢林江湖洎同門諸尊宿。師有拈香頌曰、不知傳法正耶邪、滅却還他老骨楂〔査〕、微笑春回百年後、花園猶有一枝花。師面目厳冷、語言不容人情。諸方処畏憚。住竜安十餘年。忽示微疾、寛正三年三月十八日卯刻、示衆訖順寂。世壽七十、法臘五十三。諸徒奉全身塔于大雲山西北之丘。嗣師法雪江深禅師一人而已。」　　贐

訓読

「龍安義天詔禅師

師、諱は玄詔(旧名明詔、後に玄承と改め、晩年に又玄詔と自称す)、字は義天。日峰に嗣ぐ。土州の人。俗姓は蘇我氏。入鹿大臣の裔の栄子なり。幼くして穎異。父は王法師を以って之に名づく。十五歳、本州天忠寺の義山和尚に依って薙髪す。義山は乃ち霊樹の三光国師の高弟なり。師歳十八歳にて得度し、航海して上京、直ちに東山建仁寺に登り、掛塔す。開山塔の護国院に在り、初め侍客に部署し、又侍香に転ず。孤芳菊和尚住山の日、請て蔵司と為る。結制して秉拂、京兆源公悦道居士（細川勝元）が法筵に臨み、楽聞す。左右に謂て曰く、吾州の慶なり、と。既に蔵司職を罷めて、忽ち参方の興を動かす。次の年起単、福聚の春夫に見え、粗ぼ宗要を扣く。両年を経て東遊し、尾州の犬山に到り、瑞泉の日峰和尚に参ず。峰は素(モトヨリ)接人を以って急たり。槌拂倦むこと無し。師も亦力を着け猛烈、殆ど寝食を忘る。或いは磐石上に通霄兀坐、或いは廊廡の間に月を踏んで経行す。昼夜を舎かず、専一に研究すること五年、大休歇の田地に搆(イタリ)得、了りたるなり。日峰は法語を付し、其の略に曰く、玄承蔵司は参禅有年、雪辛霜苦、玄微を及尽す。風塵草動、宗猷に承当す。謂つべし、我が家の真種草なり、と。直に是れ把得定して、生鉄が鋳就するが如くに相似たり。時に応永三十五年(1402)戊申の春なり。已りて師は父憂に丁り、郷里に還る。里人相議して曰く、粉楡は今烏鉢花を現ず。豈是れ大因縁に非ずや。当に一寺を造りて以って師を留めむべし、と。既に山を鑿り地を規りて、師に言ぃて曰く、願くは花扁を定めて、開法の場と為さんことを、と。師は久しく停まる意無く、曲げて郷井の情に順う。卒に竜門山瑞巌禅寺の額を書し、未だ工を它めざるに上京して養源師翁に参覲す。即ち辞去して、濃州に之く。可児郡の愚溪菴に居す。遂に又尾陽瑞泉精舎に徒き、看院すること累年。師翁が入滅するに及びて、重ねて入洛し、養源塔主と為る。次の年、日峰三年忌に値う。頌有りて曰く、阿鼻無間の焔、天に亘る。日々口業を償い、已に三年、併せて熱鉄数枚を呑み了り、吐いて栴檀一炷の烟と作す。是の時京兆源公勝元は年未だ弱冠。一日暫く嵯峨に如(ゆ)く。西京を経由して、師が養源院に住むを聞き得て、駕を枉げて参礼す。昔、先に春巒居士〔細川頼之〕が溘然に臨みて日峰和尚を拝請して、生死の一大事因縁を問う。是を以っての因縁の故に、心を傾くに至る。且く一梵刹を図建し、請うて師を住持せしむ。当に公余を以って道を扣かんとするなり。他日、人をして懇志を具陳せしむ。師は感泣して然諾せり。仍って洛の東西を相攸し、勝概を北山の巓に獲る。乃ち父老に問う、是は誰が家山か、と。父老曰く、徳大寺殿右府〔實能〕の管内の地なり、と。京兆便ち食邑地を一所割きて、奉じて以って之

に易う。遂に伽藍を草剏し、師を拝請して焉に住持せしむ。大雲山龍安禅寺と号す。兜率悦が張無尽に接するの機縁を用うるなり。然して師は日峰師翁を奉じて開山始祖と為す。是に於いて四来の学者雲集す。上古の風規は粛如たり。厥の明年、京兆は亦丹州に一精舎を建ち、師に請いて開山とす。其地名は八木村故に米山龍興寺と号す。藺陳尊宿の高風を慕うなり。普請資くる日、師は京兆と一箕の土を運び、以って清衆の労に先んず。然か洛の丹と僅か一日程。師は毎に往来して、学者を勘験す。且つ日々作務し、雨雪と雖も休まず。小根劣機の輩は勤苦に堪えず、多くは気索きて走る。勅黄忽ち降り、請うて大徳寺に住せしむ。入寺の日、勅使法筵に臨む。源京兆は諸官員と擁衛し森厳たり。開堂罷り、闕に参りて謝恩し、便殿に入対す。三日住して退鼓を鳴らし、龍安寺に帰る。爰に妙心開山百年忌の辰に値う。衣資十萬銭を以って五山諸刹に分送し、大衆に俵賜す。諷経を要いず、本山に就いて大会斎を営弁す。叢林江湖洎び同門諸尊宿を迎請す。師に拈香有り、頌に曰く、知らず、伝法正か邪か。滅却は他の老骨査に還す。微笑の春は回りて百年後、花園に猶一枝の花有り。師の面目は厳冷、語言は人情を容れず。諸方は畏憚に処す。竜安に住すること十余年。忽ち微疾を示し、寛正三年（1462）三月十八日卯の刻、衆に示し訖りて順寂す。世寿七十、法臘五十三。諸徒は全身を奉じて大雲山西北の丘に塔す。師の法を嗣ぐ者は雪江深禅師一人のみ。」

雪江宗深伝の翻刻

「師諱宗深、雪江其字也。嗣義天。摂州人也。俗姓源氏。其先野間侍中〔従〕。早以勇聞。大相國仁山大居士開運初、以羽檄招致于麾下、賜食邑於野間庄、遂以家居焉。師生而穎利、齠齔有出塵気質。稍長辞親。親不割愛。竟逃趨京。途逢一僧、偕行及第五橋。僧顧而問、子欲安之。師因伸依付之情。僧乃相携、帰建仁五葉庵、付文瑛禅師。禅師一見器、許。名曰正深。撫憐經年。一日西歸、省親。邑郷有薬師堂。頗有霊験。師詣之黙禱、但願頓發明心地。既而再還東山。晨鐘暮鼓一々無不發参玄奥矣。於是拜辞本師、適尾陽。在瑞泉日峰和尚席下。自従参堂、啖辛喫苦者年旧矣。峰入洛亦従之。妙心寺再興後、峰自営小院而居。號曰養源院。院計枯淡、諸役乏人。師自請任維那者三年、不喫常住飯。先是日峰住青龍山之日、既以臨済正脉付属承蔵主義天。至是祥侍者雲谷、朔蔵司桃隠亦相次受印可去。師既罷参、未蒙印證而峰毎向人稱、正深維那必也在一方、接人去矣。仍改諱宗深、字称雪江。一日勧諭曰、子姑従承蔵司去。時義天赴瑞泉看院也。師稟慈旨、相随而東、再入師兄鑪鞴。旭鍛曛錬、艱難備嘗者亦有年矣。義天之風孤硬、難當。不輪許可人。毎請益、但遭呵咄耳。及住龍安、請師為養源塔主。師在養源猶以寅夕往復於龍安、入室参詳。混衆孜々。後学弗之知。竊謂、院主機不薦。兩師叔聞之時、復爬痒然、師面無慚色。一日偶動隠遁之興、潜入丹丘別院。掩関于南縣山中。州人小河丹後守力(ツトメテ)致供給。無(幾)何龍安遣人専介、堅請。不得已再帰養源。義天以喜。京兆源公勝元渇仰宗門、日扣竜安室。時復謁養源、擬執助發之事。師固拒之。不肯應接。然京兆尊師愈〔々〕親切矣。義天臨示寂、付師法語曰、自従老虚堂付心印於大應、至先師第六世。紹継綿々不絶也。宗深座元久先師侍、参禅有年矣。山僧詰其所以、祖師全機證徹。已至深奥矣。山僧又何言。書以為印證焉耳。粤旬餘義天入滅。京兆便具禮請師継住龍安寺。歸敬不減先師。参詳亦如疇昔。先是雲谷・桃隠相遷化、汾陽・大樹並絶其嗣故、三大老會裏参従悉皆輻輳於師席下。於是龍安門風益〔々〕振。

湖海雲衲日馳迹而以来、洛之妙心、摂之海清、河内之観音、尾陽瑞泉、丹丘龍興已下大凡自門諸寺庵唯師一統而住持。(後来得法嗣四人。各以一院分付之。微笑庵景川、天授院悟渓、退蔵院特芳、養源院英朝、餘寺院亦四人輪次交代、周而復始。遺命如是)寛正三年之秋、大徳禅寺適〔々〕虚主席。山門具状請師。次日勅黄特降。鈞帖申命、以八月末入寺。勅使車駕入山。叢林竜象併集、江湖包笠趨風。細川京兆・山名金悟諸官員擁衛法筵。化儀可観矣。開堂罷、詣闕謝恩、入對便殿。住三日而退、随義天例也。應仁元年丁亥天下大乱。洛中小刹盡罹兵燹。大徳・妙心・龍安亦咸為焦土矣。師屏居於丹之龍興寺。前関白桃花禅閣〔一條兼良〕作詩、寄師曰、聞説、龍興雲亦浮雲、龍変化巻潭湫。喝雷棒雨無途轍、天下蒼生蘇息不。師和答曰。喝雷轟起尽閻浮、解道龍興百丈湫。殿下仁風扇九野、等閑吹散陣雲不。文明初京兆公於城中権建梵宇、迎師而居。亦扁曰龍安。公於干戈間日々参禅。灼然透徹佛祖玄奥了。公法諱宗寶、義天所名。就師需道号、号曰仁栄。一日俄不豫。盧扁拱手而退。師以清晨訪病閭。公曰、看涅槃。師曰、瞎。曰、正當与麽時如何。師云、珎重。公合掌而薨矣。實文明七年乙未五月十一日也。師毎稱、仁榮蓋夫裴相國・陳尚書・楊季・二張之流亜乎哉。諒闇罷、太夫人革(メテ)府第作精舎、築墳墓于寝所之跡。請師遷而居之。復用龍安為額矣。京師陥兵已来華蓋蒙塵有年于此。上皇偶〔々〕聞花園玉鳳院有親筆尊容幀子、詔而迎於行在所、七日供養。仍染宸翰、賛曰、傳如来正法、坐玉鳳禅宮。稽首花園帝。萬年鎮日東。又題其後曰、依妙心住持雪江望書之。(後花園院御製也)又開山塔有宸奎一函。上披緘睿覧、大驚嘆。一日特降妙心寺再興之詔。廣橋左中辨藤公兼顯所敷奏也。師感恩綸、日々作務。但専經度之功、不論営締之美。凡受檀施、悉以充修造。堂舎旧趾蕪没榛荊者不朞年而大半作新。上達天聴、賜龍馬銀券、以伸睿駕也。　師少而貧窮。首在瑞泉、寒暑唯一衲、或連紙染藍、綰為手巾。然不為飢寒撓。頗有聱頭気節。及日峰歸洛、掛錫養源。一日赴次第請、到太平藤氏石窓居士家(土佐人)。純一休(狂雲)先在座上。師拶曰、金翅鳥王當宇宙。龍峰裡龍如何出頭得。純拈起扇子、擬劈面打。師制取而擲地。居士視愕然。由是崇重師、毎致檀施。無復闕衣食資。以侍奉日峰者十九年。又請益義天者十五年。凡前後三十霜々辛雪苦、古今無比倫者也。且平生慕蘭罵天之風。處々庵居、在尾陽曰妙喜、在丹丘曰洋嶼、在京曰衡梅院。皆用大恵機縁、以榜于楹間者矣。蓋師性素(モトヨリ)褊急。師叔大樹和尚嘗以急性王菩薩為戯、夫有以(ユヘ)哉。(急性王事于大恵年譜)至若熱喝雷奔、迅機電掣則天魔喪膽、亡魂。高義秋潔劇談。春和則闡提(ニモ)傾誠、具信。加之大度雅量得之天稟、風韵才華殆(チカシ)乎夙董。是故叢林名衲江湖飽参接武(アト)相見。以晩為恨也。以至武文・尊官・貴介・國大・四衆群迷瞻禮帰依、不可勝計矣。己亥暮春末独倚北窓將書、俄置筆而倒、呼侍者扶起。起来、稍甦。従是中風、左脚跛矣。不得起者八年。謝事竜安、帰老法山。雖伏病床、四来應酬、臨機無倦。嬉笑怒罵、咸作佛事。時命肩輿、以意行、不言遠近。毎詣龍祥祖塔、命侍者代炷拜祖塔。弊漏則奉經費、以令修葺。多乗涼轎出於郊野通衢、行無縁慈、為樂。異類逢則安名。有時庄園貢産、召擔夫于階下、以酒食勞之。命椎髻頽肩歌呼踏舞、縱意而遊。師視之大笑絶倒。一日召侍者、誡曰、我死便埋。莫移刻。言訖、泊然示寂。實文明十八年六月初二日也。世寿七十九、法臘六十二。諸徒以遺命奉全身、瘞於正法山西南衡梅院之塔。嗣師法者大心景川隆和尚、瑞龍悟渓頓和尚、龍潭特芳傑和尚、堆雲英朝四人也。」

訓読は紙幅が大幅に増えるので跋と共に割愛する。以下は東陽英朝の跋の翻刻で、「正法山妙心禅寺記」の次に改行し、一段落して書写している。「跋」の題は無い。

跋の翻刻

「文明年中先師在都下、撰妙心寺記洎開山行實記。英朝居丹之米嶠、遠寄〔書〕来見示。且命曰、得間校正、別謄一本来。母謙譲惟幸。弗免、謹如教矣。粤明年春、師忽中風。諸子蒼惶、参覲。某亦趨庭下。而師在病床嬉笑怒罵、都無別事。唯嘆宗綱已墜而已。旋渉胗剤。尊候有間、遂捃摭四世緒餘。目成一藁、留在骨董箱中。恰似待後世子雲者。先師去世後、特芳法兄在龍安、兼領法山席。住持事繁。偶〔々〕視遺藁、欲嘱累余。余時感沈痾、手戦於筆、眼眩於書。以故固辞矣。延徳初幸奉　綸命猥董莅茲山。一日検校衡梅書籍之次、無端撞着這未了公案。寔殃及児孫者哉。猶豫間花園三霜之期満矣。懐之帰老濃陽。庵居閑適無事。便漫賣弄青氈、以償旧債焉耳。於是先師行実未曾有記者、夫奈蜂桶羊何。竊思居常茶話餘多。談出世始末、聞所不聞所、見所不見所。何況一棒一喝、　中毒知毒。此皆先師実録也。仍記概略、以系于第六世、目曰正法山六祖傳。此外上堂・小参・偈頌・小佛事見于語録。時明應五年丙辰春王正月　日、嗣法小師英朝炷香百拜、謹書于岐山之下。」

論考

日峰は、足利義満が大内掃討の続きに取り上げた妙心寺の再興に励み、「中興開山」の称号を一門から贈られ、自から建てた塔頭・養源院を塔所とした。雪江は三十数年、日峰と義天に参禅して、晩年の龍安寺・義天の法嗣となった。自からは塔頭に衡梅院を創設して、中風の八年間を療養して没したが、法嗣に景川・特芳・悟谿・東陽が居て四派に分立した。東陽英朝は美濃に帰って編集したとあるから、雪江伝での「堆雲之英朝」とあり、堆雲庵は大仙寺の前身だったのである。恐らく東陽の生家だったのではないか。細目村から和知村へ、稲葉家と愚堂和尚が大仙寺を移転･拡張した話は小編「大円宝鑑国師愚堂和尚年譜」寛永六年の項に在る。(小編『大円宝鑑国師愚堂和尚語録』、大東出版社、平成二十二年所収)大仙寺の前身を郷土史家は、黒瀬村の不二庵としているが(『美濃大仙寺史』、大仙寺、昭和五十六年)、これは古田家の未亡人が建立した尼寺で、堆雲庵とは関係ない。東陽自身が美濃の堆雲庵に「帰老」して、本書を編集した自坊としているのである。「堆雲録」と称することもある。堆雲庵はその後大仙寺と改称し、愚堂和尚の時に今の八百津に移転した。小編『大円宝鑑国師愚堂和尚語録』中の「大円宝鑑国師愚堂和年譜」の寛永六年の項参照。東陽はその後、美濃国の新加納・少林寺を開創して、永正元年(1504)に没した。

妙心寺五世と六世の翻刻が了り、訓読は半分ほど公開したが、次の機会に全部開示する。雪江の難解な漢字は『角川漢和中辞典』で確認しながら、Wordの収納文字を拾っていったが、殆どの漢字があったのは驚異的な進歩である。訓読は翻刻をコピーしてから、和文に崩していけば良いので、これも電子植字の利点である。天正十七年（1589）に最終的に書写したのは、霊雲院を大休から継承した月航玄津禅師（正親町帝から普濟英宗禅師号を贈られている）である。本山に三度上堂したのに、会津の興徳寺(廃寺)の開山になっているので「陸陽之林子」(陸奥の国の引退僧＝先住職)を名乗って、謙虚な人柄が伺われる。「霊雲小檐下」は「霊雲小住」の意味で、晩年織田信長の妹が開基である龍安寺塔頭・霊光院の開山も兼務した時の晩年に書写したのである。付録に師の大休の法語を載せている。雪江伝の一條兼良の偈の第一句は八言になっ

ているので、「聞説」(聞くならく)をそのように読んだ。「文明年中」は1489 ～ 1497年。尚、 故・松田紹典師はかつて同人誌『正法』第三巻に、「犬山臨渓院蔵写本二種について」と題して、無因・日峰・義天・雪江など諸禅師の新発見の偈頌を調査・発表している(昭和59年)。東陽は「正法山妙心禅寺記」を付録のような扱いにしているが、歴代住持の概略も記していて、『正法山六祖傳』のintroductionの役割をしているので、我々はそのように配置して、「『正法山六祖傳』の原本」一と二を『印度學佛教學研究』七十巻一号(1921)と七十一巻一号(1922)に発表した。明応五年は1496年で、東陽はその八年後に各務原新加納の少林寺で没した。新・旧字の字体等も厳密に書写の侭にした。末筆になりましたが、この写本を開示して頂いた龍谷大学図書館と、紹介して頂いた四天王寺大学図書館に篤く御礼申し上げます。